

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第29回 第12回がん政策サミットに参加して

6月に東京で開催された「がん政策サミット」。萩・石見空港からの羽田便は午後の便ばかりなので、顔見知りが多いが、

たくさんの学び、新しい“縁”

今回初参加の仲間を連れ参加した。同じ患者仲間N氏だ。さらに益田市健康増進センターからがんサロン担当で「がんサロン支援塾」にもスタッフとして関わってくれているKさんも誘った。県行政からは毎回参加しているが、市行政からは今回が初参加。その意味はがん医療対策は地域行政が関わったほうが効率が良いと思ったからだ。

全国各地から130名ほどが集まった。がん患者リーダー、県行政、県議会議員、医療現場から院長クラスが参加。プログラムは過密に組まれていて、患者の私達にはちょっと厳しいスケジュールだった。でも沢山の学びの場、新しいえにしに参加した。同じ患者仲間N氏だ。さらに益田市健康増進センターからがんサロン担当で「がんサロン支援塾」にもスタッフとして関わってくれているKさんも誘った。県行政からは毎回参加しているが、市行政からは今回が初参加。その意味はがん医療対策は地域行政が関わったほうが効率が良いと思ったからだ。

北海道がんサミットが話題となり、北海道からも総勢14名が参加したが、大半が医療者だったのは医療者主導のがん対策だからであろう。がん患者も積極的に参加していかねばいけない。がん対策、がんサロン運営は患者主導であるべきなのに、どうしても医療者主導になってしまっている。この医療者主導から患者主導にギアチェンジするのが難しい。医療側に頼り切っている患者が多いからだろう。でも患者にとっては、自分のこととして捉えなければ将来は無い。

最近特に感じることで、多職種連携が謳われているが、果たして出ているだろうか。言葉だけが先走りしている感じが否めない。がん政策サミットでも「6位1体」を掲げ、連携のトレーニングを行っているが、心と心がひとつにならないければ、本当の連携は難しい。連携の難しさをひしひしと感じる。